



## 「致良知」

頭取 大道 良夫

犯罪の凶悪化、低年齢化や企業の不祥事など殺伐とした出来事が相次ぐ最近の社会情勢に、「この先、いつたいどうなるのだろうか」と暗澹たる気持ちになるのは、私だけではないでしょう。人としての倫理が崩壊に向かう「モラルハザード」の時代に私たちはいかに生きるべきか。

そんな折、映画「近江聖人中江藤樹」を見る機会があり、「致良知」という言葉に出会いました。

浅学の身で語るのは恐縮ですが、あえてその教えを申し上げますと、人は「良知」（美しい心）を持つて生まれています。ところが次第に醜い欲望が起きて「良知」を曇らせてしまいます。私たちは自分の欲望に打ち克つて「良知」を鏡のように磨き、その「良知」に従って行いを正しくするよう日々努力することが大切です。

そのためには、普段の生活やまわりの人々との交わりのなかで、自ら「五事を正す」ことが「良知」に至る道である、と教えておられます。「五事」とは、「貌」（顔かたち）、「言」（言葉づかい）、「視」（まなざし）、「聴」（よく聞く）、「思」（思いやり）を言い、それを正すとは、「なごやかな顔つきをし、思いやりのある言葉で話しかけ、澄んだ目でものごとを見つめ、耳を傾けて

人の話を聴き、まごころこめて相手のことを思う」との教えです。

先日、「致良知」の心をもっと深く知りたいたと中江藤樹先生（1608～1648）の旧跡（滋賀県高島市安曇川町上小川）を訪ねました。

没後約400年経った今も墓所、神社、私塾の藤樹書院・良知館が地元のボランティアの皆さんによって守られ、記念館なども整備・運営されています。そしてなにより、地元の家庭や事業所の多くには今も「致良知」の額が飾られ、藤樹先生の教えが、現代を生きる地元の皆さんの心に深く根付き、支えになっていることを知り、いまさながら感動しました。

映画「近江聖人中江藤樹」の最後に、このような言葉が流れます。「心の闇を抱えた陰惨な事件が続く現代社会にこそ、必要とされる教えである。400年経った今でも教えが色あせないのは、藤樹の分け隔てのない深い愛情によるものだろう」。

ともすれば、日々の忙しさに紛れて心の座標軸も揺れがちで「致良知」にはほど遠いですが、近江が生んだ、日本でただ一人「聖人」と呼ばれる藤樹先生の心をわが心として日々を生き、仕事に励みたいと意を新たにしました次第です。